

力学 予習ノート 第3回

学生番号 05502211

2023 年 8 月 5 日

1 剛体の回転運動についての一般論

大きさがある物体 (剛体) は回転可能である。密度 ρ の剛体 M を考える。
体積 ΔV_i の N 個の ΔM_i に分割することを考える。すなわち $\Delta M_i = \rho(\mathbf{r}_i)\Delta V_i$ である。このとき、剛体の質量 M は

$$M = \lim_{N \rightarrow \infty} \rho(\mathbf{r}_i)\Delta V_i = \int \rho(\mathbf{r}_i)dV \quad (1)$$

同様に体積は

$$V = \lim_{N \rightarrow \infty} \sum_{i=1}^N \Delta V_i = \int dV \quad (2)$$

重心について

$$M\mathbf{r}_G = \sum_{i=1}^N m_i\mathbf{r}_i, \quad \mathbf{r}_G = \frac{\sum_{i=1}^N m_i\mathbf{r}_i}{\sum_{i=1}^N m_i} \quad (3)$$

であったので、剛体の重心 \mathbf{r}_G について

$$M\mathbf{r}_G = \lim_{N \rightarrow \infty} \sum_{i=1}^N \mathbf{r}_i\Delta M_i = \lim_{N \rightarrow \infty} \mathbf{r}_i\rho(\mathbf{r}_i)\Delta V_i = \int \mathbf{r}\rho(\mathbf{r})dV \quad (4)$$

となる。ある点から見た剛体の各点の位置ベクトルが \mathbf{r}_i であり、その点から見た重心の位置ベクトルが \mathbf{r}_G である。この重心から見た剛体の各点の位置ベクトルを \mathbf{r}'_i とすると、 $\mathbf{r}' = \mathbf{r} - \mathbf{r}_G$ であるので

$$\int \mathbf{r}'\rho(\mathbf{r})dV = \int (\mathbf{r} - \mathbf{r}_G)\rho(\mathbf{r})dV = \int \mathbf{r}\rho(\mathbf{r})dV - M\mathbf{r}_G = 0 \quad (5)$$

となる。これは自明で重心位置から見たとき、その重心は原点となる。

<例> 厚み d で、底辺 a 高さ b の三角形の重心を求めよ。

まず、この連続体の全質量は

$$M = \int \rho dV = \rho d \int_0^a dx \int_0^{\frac{b}{a}x} dy = \rho d \int_0^a \frac{b}{a} x dx = \frac{b\rho d}{a} \left[\frac{x^2}{2} \right]_0^a = \frac{abd}{2} \rho$$

次に重心の x 座標について

$$\begin{aligned} Mx_G &= \int \rho x dV = \rho d \int_0^a x dx \int_0^{\frac{b}{a}x} dy \\ &= \rho d \int_0^a \frac{b}{a} x^2 dx = \frac{b\rho d}{a} \left[\frac{x^3}{3} \right]_0^a = \frac{a^2 b d}{3} \rho \quad \therefore x_G = \frac{2}{3} a \end{aligned}$$

次に重心の y 座標について

$$\begin{aligned} My_G &= \int \rho y dV = \rho d \int_0^a dx \int_0^{\frac{b}{a}x} y dy = \rho d \int_0^a dx \left[\frac{y^2}{2} \right]_0^{\frac{b}{a}x} \\ &= \rho d \int_0^a \frac{b^2}{2a^2} x^2 dx = \frac{b^2 \rho d}{2a^2} \left[\frac{x^3}{3} \right]_0^a = \frac{ab^2 d}{6} \rho \quad \therefore y_G = \frac{1}{3} b \end{aligned}$$

<例>一様な面密度 σ の半径 a の重心の位置を求めよ。

極座標系で考える。まず、 $dS = r dr d\theta$ 、 $x = r \cos \theta$ 、 $y = r \sin \theta$

重心座標 x について

$$\begin{aligned} x_G &= \frac{Mx_G}{M} = \frac{\int \sigma x dS}{\int \sigma dS} = \frac{\int_0^a \int_0^\pi \sigma r \cos \theta r dr d\theta}{\int_0^a \int_0^\pi \sigma r dr d\theta} = \frac{\sigma \int_0^a r^2 dr \int_0^\pi \cos \theta d\theta}{\sigma \int_0^a r dr \int_0^\pi d\theta} \\ &= \frac{\frac{a^2}{3} [\sin \theta]_0^\pi}{\frac{a^2}{2} \pi} = \frac{2a}{3\pi} \times 0 = 0 \end{aligned}$$

y 座標について

$$\begin{aligned} y_G &= \frac{My_G}{M} = \frac{\int \sigma y dS}{\int \sigma dS} = \frac{\int_0^a \int_0^\pi \sigma r \sin \theta r dr d\theta}{\int_0^a \int_0^\pi \sigma r dr d\theta} = \frac{\sigma \int_0^a r^2 dr \int_0^\pi \sin \theta d\theta}{\sigma \int_0^a r dr \int_0^\pi d\theta} \\ &= \frac{\frac{a^3}{3} [-\cos \theta]_0^\pi}{\frac{a^2}{2} \pi} = \frac{4a}{3\pi} \end{aligned}$$

重力について、物体は質量に比例する力を受けるので、微小体積に分割して考えられる。重力 \mathbf{F}_g について

$$\mathbf{F}_g = \lim_{N \rightarrow \infty} \sum_{i=1}^N \Delta M_i \mathbf{g} = \left(\lim_{N \rightarrow \infty} \sum_{i=1}^N \rho(\mathbf{r}_i) \Delta V_i \right) \mathbf{g} = \int \rho(\mathbf{r}) dV \mathbf{g} = M \mathbf{g} \quad (6)$$

これより剛体の運動を考えると、重力は重心に働くと考えても良い。剛体の角運動量は

$$\mathbf{L} = \sum (\mathbf{r}_i \times \mathbf{p}_i) = \lim_{N \rightarrow \infty} \sum_{i=1}^N \mathbf{r}_i \times \Delta M_i \frac{d\mathbf{r}_i}{dt} = \lim_{N \rightarrow \infty} \sum_{i=1}^N \mathbf{r}_i \times \rho(\mathbf{r}_i) \Delta V \frac{d\mathbf{r}_i}{dt} = \int \rho(\mathbf{r}) \mathbf{r} \times \frac{d\mathbf{r}}{dt} dV \quad (7)$$

と書ける。 $\rho(\mathbf{r})$ はスカラーであることに注意する。次に重力のモーメントは

$$\begin{aligned} \mathbf{N}_g &= \lim_{N \rightarrow \infty} \sum_{i=1}^N \mathbf{r}_i \times \Delta M_i \mathbf{g} = \int \mathbf{r} \rho(\mathbf{r}) dV \times \mathbf{g} = \int (\mathbf{r}_G + \mathbf{r}') \rho(\mathbf{r}) dV \times \mathbf{g} \\ &= \int \mathbf{r}_G \rho(\mathbf{r}) dV \times \mathbf{g} + \int \mathbf{r}' \rho(\mathbf{r}) dV \times \mathbf{g} = \mathbf{r}_G \left(\int \rho(\mathbf{r}) dV \right) \times \mathbf{g} = \mathbf{r}_G \times M \mathbf{g} \end{aligned} \quad (8)$$

となる。ここで \mathbf{r}_G は重心の位置ベクトルで \mathbf{r}' は重心を原点とする剛体の各点の位置ベクトルである。第二段目の第一式は重心のモーメントと重心周りのモーメントであるが、2 項目に関しては 0 になる。これにより $\mathbf{N}_g = \mathbf{r}_G \times M\mathbf{g}$ が求まるが、これより剛体の重力のモーメントは、重心に働くと考えてよい。ただし、全モーメントによる角運動量の変化を考える際には、重力以外の他の外力は個々で計算して和をとる必要がある。

$$\frac{d\mathbf{L}}{dt} = \mathbf{r}_G \times M\mathbf{g} + \sum_{i=1}^N \mathbf{r}_i \times \mathbf{F}_i \quad (9)$$

偶力のモーメントについて少し考える。偶力とは、剛体の 2 点に逆向きに等しい力が働いているときのそれぞれの力である。すなわち、 $\mathbf{F}_1, \mathbf{F}_2 = -\mathbf{F}_1$ であり、 $\mathbf{F}_1 // \mathbf{F}_2$ である。このとき、

$$\mathbf{F} = \mathbf{F}_1 + \mathbf{F}_2 = \mathbf{F}_1 - \mathbf{F}_1 = 0$$

であるから、並進運動はしない。しかし、原点周りの偶力のモーメントは

$$\mathbf{N} = \mathbf{r}_1 \times \mathbf{F}_1 + \mathbf{r}_2 \times \mathbf{F}_2 = (\mathbf{r}_1 - \mathbf{r}_2) \times \mathbf{F}_1 \neq 0$$

と相対的な位置ベクトルと力の積となる。これより偶力のモーメントの大きさは原点の取り方に依らない。

次に慣性モーメントについて考えていく。

まず z 方向の角運動量 L_z は

$$L_z = \left[\int \mathbf{r} \times \rho(\mathbf{r}) \frac{d\mathbf{r}}{dt dV} \right]_z = \int \rho(\mathbf{r}) \left(\mathbf{r} \times \frac{d\mathbf{r}}{dt} \right)_z dV = \int \rho(\mathbf{r}) (xv_y - yv_x) dV \quad (10)$$

である。これを円柱座標系に直してみる。位置ベクトル \mathbf{r} の xy 平面への射影が x 軸となす角を θ 、z 軸へのあしの長さを ξ とする。剛体では ξ が一定であることに注意すると、

$$\begin{aligned} x &= \xi \cos \theta, & y &= \xi \sin \theta \\ v_x &= \frac{dx}{dt} = \frac{d\xi}{dt} \cos \theta - \xi \frac{d\theta}{dt} \sin \theta = -\xi \frac{d\theta}{dt} \sin \theta \\ v_y &= \frac{dy}{dt} = \frac{d\xi}{dt} \sin \theta + \xi \frac{d\theta}{dt} \cos \theta = \xi \frac{d\theta}{dt} \cos \theta \end{aligned}$$

であるから、角運動量 L_z は

$$\begin{aligned} L_z &= \int \rho(\mathbf{r}) (xv_y - yv_x) dV = \int \xi^2 \rho(\mathbf{r}) (\cos^2 \theta + \sin^2 \theta) \frac{d\theta}{dt} dV \\ &= \left(\int \xi^2 \rho(\mathbf{r}) dV \right) \frac{d\theta}{dt} = I_z \frac{d\theta}{dt} \end{aligned} \quad (11)$$

と表せられる。ここで

$$I_z \equiv \int \xi^2 \rho(\mathbf{r}) dV = \int (x^2 + y^2) \rho(\mathbf{r}) dV \quad [L^2 M] \quad (12)$$

と定義した。この I_z が慣性モーメントと呼ばれ、回転運動での質量的役割、回転のしにくさを表す量である。これより力のモーメントは

$$N_z = \frac{dL_z}{dt} = I_z \frac{d^2\theta}{dt^2} \quad (13)$$

で表され、剛体の回転における運動方程式が立てられる。実際にニュートンの運動方程式 $\mathbf{F} = m\mathbf{a}$ と見比べても I_z が回転運動での質量に対応していることが分かる。

以上は回転軸が常に一定の方向を考え、 L_z の場合に限り議論したが、一般の場合には

$$\begin{aligned}\mathbf{L} &= \int \mathbf{r} \times \frac{d\mathbf{r}}{dt} \rho(\mathbf{r}) dV \\ &= \int \mathbf{r} \times (\boldsymbol{\omega} \times \mathbf{r}) \rho dV \\ &= \int [\boldsymbol{\omega} \mathbf{r}^2 - \mathbf{r}(\boldsymbol{\omega} \cdot \mathbf{r})] \rho dV\end{aligned}\quad (14)$$

$\mathbf{r}^2 = x^2 + y^2 + z^2$, $\mathbf{r} = x\mathbf{e}_x + y\mathbf{e}_y + z\mathbf{e}_z$, $\boldsymbol{\omega} = \omega_x\mathbf{e}_x + \omega_y\mathbf{e}_y + \omega_z\mathbf{e}_z$ を用いて成分ごとに計算すると

$$\begin{pmatrix} L_x \\ L_y \\ L_z \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} I_{xx} & I_{xy} & I_{xz} \\ I_{yx} & I_{yy} & I_{yz} \\ I_{zx} & I_{zy} & I_{zz} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \omega_x \\ \omega_y \\ \omega_z \end{pmatrix}\quad (15)$$

ただし、

$$\begin{cases} I_{xx} = \int (y^2 + z^2) \rho dV, & I_{xy} = - \int xy \rho dV, & I_{xz} = - \int xz \rho dV \\ I_{yx} = I_{xy}, & I_{yy} = \int (z^2 + x^2) \rho dV, & I_{yz} = - \int yz \rho dV \\ I_{zx} = I_{xz}, & I_{zy} = I_{yz}, & I_{zz} = \int (x^2 + y^2) \rho dV \end{cases}\quad (16)$$

である。この I_{ij} という 3^2 個の量の組は、慣性テンソルと呼ばれる 2 階のテンソルである。さらに、 $i = j$ なる成分は慣性能率、 $i \neq j$ なる成分は慣性乗積と呼ばれる。ここで (14) の式の注意をしておくと、一行目から二行目の式変形では、

$$\mathbf{r}^2 = (\text{一定}), \quad \therefore \mathbf{r} \frac{d\mathbf{r}}{dt} = 0$$

より速度ベクトルは位置ベクトルと直交していて、適当な $\boldsymbol{\omega}(t)$ を用いて

$$\frac{d\mathbf{r}}{dt} = \boldsymbol{\omega}(t) \times \mathbf{r}(t)$$

と書くことが可能であることを用いた。この ω が角速度であることは、相対運動 (回転運動) を参照。また、二行目から三行目の式変形にはベクトル解析の BAC-CAB 則を用いた。

回転軸が常に z 軸であるとき、 $\boldsymbol{\omega} = (0, 0, \omega_z = \frac{d\theta}{dt})$ と取れるので、以前の議論と一致する。

また、軸まわりの慣性能率を

$$I = \int (x^2 + y^2) \rho(\mathbf{r}) dV \equiv Mk^2\quad (17)$$

と置いたとき、この k を回転半径と呼ぶ。

$$k := \sqrt{\int \xi^2 \rho(\mathbf{r}) dV / M}$$

で表される通り、剛体の各部分の回転軸からの距離に質量の重みをつけた 2 乗平均として解釈される。

慣性モーメントについて2つ定理を挙げる。

[定理1] 移動則

質量 M なる剛体の重心 G を通る軸の周りの慣性モーメント (慣性能率) を I_G 、その軸に平行で h だけ離れた軸まわりの慣性モーメントを I_z とすると、

$$I_z = I_G + Mh^2 \quad (18)$$

が成り立つ。

[定理2] 平板合成則

薄い平板状の剛体の一点 O を通り板に垂直な軸まわりの慣性モーメント (慣性能率) を I_{zz} とし、 O 点を通り、平板に平行で互いに直交する2軸のまわりの慣性モーメント (慣性能率) を I_{xx}, I_{yy} とすれば、

$$I_{zz} = I_{xx} + I_{yy} \quad (19)$$

が成り立つ。

(証明1)

$\mathbf{r} = \mathbf{r}_G + \mathbf{r}'$ 、慣性モーメントの定義 $I_G = \int (x'^2 + y'^2) \rho dV$ を用いて I_z について式変形をしていくと

$$\begin{aligned} I_z &= \int (x^2 + y^2) \rho(\mathbf{r}) dV \\ &= \int ((x_G + x')^2 + (y_G + y')^2) \rho(\mathbf{r}) dV \\ &= (x_G^2 + y_G^2) \int \rho(\mathbf{r}) dV + 2x_G \int x' \rho(\mathbf{r}) dV + 2y_G \int y' \rho(\mathbf{r}) dV + \int (x'^2 + y'^2) \rho(\mathbf{r}) dV \\ &= Mh^2 + I_G \end{aligned}$$

ただし、重心を原点としたときの重心座標は0であるから $\int x' \rho(\mathbf{r}) dV = \int y' \rho(\mathbf{r}) dV = 0$.

(証明2)

I_{zz} について

$$\begin{aligned} I_{zz} &= \int (x^2 + y^2) \rho(\mathbf{r}) dV = \int (x^2 + y^2) \sigma(\mathbf{r}) dS \\ &= \int x^2 \sigma(\mathbf{r}) dS + \int y^2 \sigma(\mathbf{r}) dS \end{aligned}$$

体積要素から面素への変換を行った。この場合、薄い平板を仮定してるので、 z 方向に質点は存在しない。

$$\begin{aligned} I_{xx} &:= \int (y^2 + z^2) \rho(\mathbf{r}) dV \longrightarrow \int y^2 \sigma(\mathbf{r}) dS \\ I_{yy} &:= \int (z^2 + x^2) \rho(\mathbf{r}) dV \longrightarrow \int x^2 \sigma(\mathbf{r}) dS \end{aligned}$$

となるので、結局 $I_{zz} = I_{xx} + I_{yy}$.

[演習問題]

(91)*

一様な面密度 σ で半径 a の $1/4$ 円 ($x > 0, y > 0$) の重心の位置を求めよ。

(91-2)*

厚み d 密度 ρ で一辺 a の正三角形の板について重心を計算せよ。

(92)*

一様な密度 ρ の半径 a の半球の質量を極座標で求めよ。さらにその重心の高さ z_G を求めよ。

(93.1)

慣性モーメントの重心からの移動則を証明せよ。

(93.2)

慣性モーメントの平板の合成則を証明せよ。